

『夏目漱石、読んじゃえば?』(2015年)

奥泉 光/作 河出書房新社

本書は、夏目漱石のとくに有名な作品を10作(うち一作は短編集の扱い)取り上げて、それぞれを著者:奥泉光さん独特の観点で分かりやすく紹介していく、参考書のような一冊です。春日ゆらさんの描くマンガから始まり、話し言葉で本文が進んでいきます。昔の人が書いたお話はあんまり読まないな、という方にもおすすめの夏目漱石マニュアルブックです。この本を読んで興味を持ったなら、次は

YA通信今号おすすめの夏目漱石作品にチャレンジしてみてください!



『坊ちゃん』(2009年)

夏目 漱石/作 SDP

「親譲りの無鉄砲でこどものときから損ばかりしている。」というあまりに有名な書き出しはご存知の方も多いのではないのでしょうか。真っ直ぐすぎて周りの人間とうまくいかない主人公坊っちゃんの姿が、一人称で語られます。言葉の勢いがよくポンポン物語が進んでいき、セリフも多く散りばめられているので、今から110年も昔の明治時代に書かれたとは思えないほど、読みやすい文章です。坊っちゃんと一緒に嫌な奴や世の中の理不尽に対して、怒ったり泣いたりしてみませんか?

『漱石と倫敦ミイラ殺人事件』(2009年)

島田 荘司/著 光文社

イギリスに留学した夏目漱石は、下宿で亡霊の声を聞く。毎晩出てくる亡霊に悩まされた漱石は、近くに住む探偵シャーロック・ホームズを紹介され、相談に行くことにした。ところがホームズはとんでもなく変わった男で、漱石はがっかりして下宿に戻る。その後、ホームズのもとに事件の依頼が入る。人間が一夜でミイラになってしまったのだという。手掛かりは日本語の書かれたメモの切れ端。ホームズは日本に詳しい漱石に協力を求め、事件を調べ始める。はたして、事件の真相は?



『漱石先生の事件簿 猫の巻』(2007年)

柳 広司/著 理論社

癩癩^{かんしゃく}持ちで世間知らず、ご近所でも変わり者と評判の俳句好きな英語教師「先生」の家で、書生として暮らすことになった「僕」が体験する、なんとも奇妙な物語。類は友を呼ぶとは言うものの、先生を含め、先生以上に破天荒な人たちが、日々何やら事件を巻き起こします。漱石の『吾輩は猫である』を読んでいなくても楽しめる、探偵小説好きの「僕」が怪事件を推理する6つの短編からなる連作ミステリーです。



『吾輩は猫である』(2011年)

夏目 漱石/著 文藝春秋

近代文学なんて難しいのではないかと思っただけの方も多いかもかもしれません。けれど、漱石の文章は時代を経ても読みやすく書かれています。

猫の視点からみた人間の滑稽な様子が描かれています。「なんて人間は我儘^{こっけい}なんだ」と猫が感じているのはどんな時でしょう。猫の意見に深くうなずくことも多いです。漱石の当て字もおもしろく、「三馬」ってなんのことでしょう。漱石が楽しんで書いている様子がよくわかります。



『夏目漱石の手紙に学ぶ 伝える工夫』(2014年)

中川 越/著 マガジンハウス

みなさんは夏目漱石についてどのような印象をお持ちですか?文豪と呼ばれるだけに堅苦しい、生真面目な印象をお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。しかし、漱石の手紙を見てみると、思いやりのある、とても誠実で優しい人だということがわかります。「さすが作家!!」とうならせる手紙からユーモアある手紙までたくさんのお手紙の書き方が載っています。漱石を身近に感じられる本です。

